

不確定性標識としての「なんか」

富 樫 純 一

キーワード：なんか、談話標識、不確定性、見切り発車、出現順序

1. 問題の所在

日常会話で頻出する形式の一つに「なんか」がある。不定表現「なにか」が由来であるが、実際の会話においては不定であることを示す以外のさまざまな機能が見られるとされている。頻出であるが故に、分析対象としても設定されやすく、多くの先行研究が「なんか」の諸特徴を考察している。

本稿では先行研究の知見にもとづき、「なんか」の全体像を描き出していきたい。そして、「なんか」が持つ本質と多機能性との関連、および機能変化の道筋について説明を試みる。構成は以下の通りである。

- (a) 「なんか」に関する先行研究のまとめと問題点の指摘（2 節）
- (b) 「なんか」の意味と機能を形作る全体像の構築（3 節）
- (c) いくつかの現象分析による「なんか」全体像の検証（4 節・5 節）

2. 「なんか」に関する先行研究

本節では「なんか」を扱った先行研究を観点別に概観し、意味や機能の記述をまとめ、問題点を指摘していく。

2.1. 不定表現・副詞としての「なんか」

「なんか」が不定表現「なにか」に疑問の「か」が付いた形を元とする、という点については論をまたないであろう^{*1}。

不定表現の「なんか」は（1）のようなものである。

(1) なんか食べたい。(＝なにか食べたい)

(1) では「食べる」対象が不定、不確定であることを表している。つまり、命題内の個別の情報に対する不確定性を示すと捉えることができる。

副詞の「なんか」は(2)のような例であり、小池(2006)や大工原(2010)で分析されている。

(2) なんか誰か来たみたいだ。(≒どうも)

(3) 「証拠などに明確には依存せず、事柄のありようを漠然とではあるが(直感的に)認定する作用を表わす」
(小池(2006:16))

(4) 「「今語られる命題情報は、探索によって得られたものだ」ということを表すエビデンシャル」
(大工原(2010:112))

「どうも」などと同じ、いわゆる証拠性の副詞という位置付けである。「漠然とした認定」「探索」といった記述から分かるとおり、命題を把握するための根拠がそれほど明確ではないという不確定性が本質にあるとまとめられる。

大工原(2010)の「探索」は、「未知の環境について、どんな様子なのか調べる行動」であり、得られる情報は十全なものとはならない可能性が高い。その意味では、探索行為にも不確定性を認めることができる。

また、中田(1991)は副詞そのものが対人的な機能も担っていると指摘している。特に「なんか」については、「やわらげ・ぼかしのはたらきをする」と述べている。となると、相互行為的な機能との結びつきを無視することはできないだろう。

2.2. 談話分析的観点から見る「なんか」

多くの先行研究では、談話分析的な観点から「なんか」に多種多様な機能を導出している。例えば、「和らげ」((5))や「ターン獲得」((6))といった機能が指摘されている。

(5) なんかビールとピザって合わない気がする。

(SAITO(1992)、表記を日本語に修正)

(6) なんかさあ、昨日ヴィトンのバッグもって成金みたいな人が来て…

(飯尾(2006)、表記一部修正)

「なんか」をいわゆる談話標識と位置付け、その機能を導出・分類していく研

究は、SAITO（1992）から始まり、数多くの分析がなされている。諸研究の成果を、本稿筆者の理解・解釈を踏まえ、類似の機能をまとめた形で表にすると以下のようになる。

機能	指摘している先行研究
和らげ	中田（1991）、SAITO（1992）、YAMAMOTO（1998）、鈴木（2000）、エメット（2001）、飯尾（2006）、葛（2020）、肖（2024）
ためらい・躊躇・曖昧化など	渡邊（1997）、PHILIPS（1998）、YAMAMOTO（1998）、鈴木（2000）、エメット（2001）、小出（2009）、ルカムト（2012）、葛（2020）
控えめな態度・謙遜	エメット（2001）、田中（2020）、肖（2024）
関連情報の具体化・引用	内田（2002）、ルカムト（2012）
ターン獲得・ターン保持	SAITO（1992）、PHILIPS（1998）、飯尾（2006）、林（2006）、福原（2009）、松隈（2018）、葛（2020）
前置き・予告	中溝（2000）、内田（2002）、林（2006）、小出（2009）、カノックワン（2016）、楊（2019）、田中（2020）
話題の開始や切り出し・語りの駆動など	鈴木（2000）、エメット（2001）、内田（2002）、小出（2009）、森（2012）、杉崎（2018）、松隈（2018）
相手を引きつける・興味や関心を引き出すこと	渡邊（1997）、山根（2002）、杉崎（2019）、若松（2019）、田中（2020）
間つなぎ・時間稼ぎ・言葉探しなど	渡邊（1997）、鈴木（2000）、飯尾（2006）、山下・水上（2007）、宮永・大浜（2010）、ルカムト（2012）、松隈（2018）、葛（2020）、田中（2020）
（言語表現などの）不確定性・不特定性	PHILIPS（1998）、鈴木（2000）、エメット（2001）、三木（2004）、本間（2011）、松隈（2018）

表「なんか」に関する先行研究の機能分類一覧

用語や概念規定には差異があるものの、ある程度共通した複数の機能が導出されているといえる。おおむね、「和らげ」「ためらい」「謙遜」といった相手への影響を考慮した談話構築であることを示す機能と、「ターン獲得・保持」「前置き」「話題の開始」のような相互行為として何らかの調整を図る対人的な機能とに大別できるだろう。

いずれの研究も「なんか」の多様な振る舞いについて事例調査を通して明らかにしようとしている。しかし、一部に「言葉探し」「不確定性」といった、心内処理の表示と思われる機能が相互行為の機能と同列に挙げられている点には疑問が残る。「謙遜」や「引用」などの個々の機能的特徴がどういったものが判然としない点も問題である。

また、機能同士の関係性が見えにくく（例えば「ターン保持」と「間つなぎ」は結局同じではないか、など）、複数の機能を羅列しているだけという印象も否めない。

しかも、これだけ「なんか」の機能が豊富だとすると、大工原（2010）が言うように、どの「なんか」がどの機能なのかが明確にはならず、聞き手もまた的確に「なんか」の機能を解釈しえないのではないかという疑問が浮かぶ。出現頻度が高いと一つ一つの解釈にかかるコストも増大してしまい、効率的ではない。このような危惧が出るのは、「なんか」の機能が羅列的であるが故に、全体像が描写できていないからではないかと考えられる。その問題を解消するためには、それぞれの機能の元となる原型を示す必要があるだろう。原型とさまざまな機能との派生関係を適切に捉えなければならない。

さらに根本的な問題として、「何故「なんか」という形式を選択するのか」という疑問に対してどの先行研究も明確な答えを出していない点が挙げられる。仮にこれだけ多機能であるならば、他の表現形式でも同等の機能を有するものがあるかもしれない。にもかかわらず、他形式ではなく「なんか」が高頻度で選ばれることにはそれなりの理由があるはずである。となると、「なんか」には独自の機能が備わっていると捉えるのが妥当な考え方となるだろう。

2.3. 意味・機能の変化の道筋を扱った研究

「なんか」が持つ機能のつながりを「派生・変化」という道筋で捉えようとした論考として、鈴木（2000）、内田（2002）、林（2006）、小出（2009）、福原（2009）、本間（2011）が挙げられる。

不定表現から談話標識に至るまでの「なんか」の変化については、鈴木（2000：76）が「不確実性・不特定性の標識という「なんか」の本質的機能から派生したものではないか」と述べているとおり、不定表現「なんか」が持つ不確実性がベースになっていると考えて間違いないだろう。

いずれの論考においても、おおむね変化の道筋は共通しており、不定表現や副詞の「なんか」が持つ不確実性が、「文法化」（内田（2002）・福原（2009））、「漂白化」（林（2006））、「希薄化」（小出（2009）・本間（2011））といったプロセスを経て、談話標識の機能を獲得していったとしている^{*2}。

だが、本質である不確実性が文法化や希薄化したことと、対人調整機能が顕現したこととのつながりが不明確であるといえる。例えば林（2006）では、「意味の漂白化」により副詞「なんか」の意味が消失して、つなぎの機能（いわゆるターン保持）が発生したとしている。しかし、何故「消失によってつなぎという特異な機能が出てくるのか」に明確な考察はなされていない。対人的な機能発生

に関するメカニズムを明らかにしなければならないだろう。

次節では、先行研究での知見および問題点をもとに、「なんか」の全体像を捉える試案を提示する。

3. 「なんか」の全体像試案

本節では不確定性という概念をベースに「なんか」の全体像（意味特徴と機能との関連性）を新たに描き出してみる。まず、「なんか」の本質を「何らかの不確定性が心内処理の結果として出力されたことの表示」と規定しておこう。これは先行研究の記述からも容易に想定できるだろう。その不確定性から語用論的効果として種々の機能（の原型）が出現するものと捉える。

重要なのは処理の結果を表示するという点である。元的不定表現「なんか」が不定という意味である以上、「最終的に不確定な結果が出力された」ことのみを示し、途中の処理過程がどういったものであるかを示さないのが、「なんか」の出力標識としての本質である。その点では、「えー（と）」や「あー」などの他の出力標識が処理過程や処理対象を厳密に規定しているのとは異なるといえる。

そして、処理プロセスが規定されないことが逆に、さまざまな処理対象へのシフトを可能とする。そのような考えをもとに、本質を共通にしたまま、心内処理の対象の異なりによって、「不定表現」「副詞」「談話標識^{*3}」に区別してみよう。それぞれ、命題内、命題の証拠、談話構築という処理対象である^{*4}。まとめると図のようになる。

	本質	処理対象の範囲			語用論的効果 【談話構築】	語用論的効果 【対人調整】
		命題内の 要素	命題の 証拠・根拠	談話構築		
「なんか」 【不定表現】	処理結果の 不確定性	○ (個別情報)				
「なんか」 【副詞】	処理結果の 不確定性		○ (観察範囲)			
「なんか」 【談話標識】	処理結果の 不確定性			○ (話題など)	➡見切り発車	➡ターン獲得

図「なんか」が持つ意味・機能の全体像

命題内の要素を処理対象とする不定表現や命題に関する証拠を処理対象とする副詞については2.1節で見たとおり、不確定性が厳然としてある。そして処理プロセスが談話そのもの、つまり話題の設定や展開を対象とし、そこに不確定性が見出された場合が談話標識となる。この談話標識としての「なんか」がさまざ

まな機能に派生する。

本稿では、談話標識の「なんか」から発生する語用論的效果の原型を「見切り発車」と呼んでおくことにする。談話構築に対する不確定性は、談話の流れや結論の不十分さを示すことになり、かつ処理としてはそのまま出力、つまり談話を開始してしまうことになる。「なんか」は見切り発車による談話開始（もしくは継続）という効果を表示する。これが先行研究でいうところの話題の開始や切り出しなどの機能である。

見切り発車を語用論的效果の原型・源泉とすると、種々の機能とのつながりが明確になる。例えば、“見切り”の側面に焦点が当たると和らげ、ためらいなどの効果が強調される結果となる。不確定なままという状態が非断定的・非押しつけ的に解釈されるためである。例示や引用といった機能についても、不確定な出力結果が「一つの例でしかなかった」「自分の言葉で再構築できず相手の発言をそのまま引用した」という見切りの形で現れたに過ぎない。そして、見切り発車の内、“発車”（開始）の側面に焦点が当たるとターン獲得・保持という対人的機能が優位に発現すると考えられる。

いずれにせよ、「なんか」の持つ不確定性は、必ずしも先行研究が指摘しているような消失・希薄化と捉えることはできないのではないか。このことは後述するように、他の談話標識との出現順序の偏りが根拠となる。

付言しておく、先行研究で「なんか」の機能の一つとされている時間稼ぎや言葉探しは本質とは位置付けられないだろう。結果の出力という本質は「処理は終わっている」のであり、時間稼ぎや検索という「処理の途中」を表示しないからである。時間稼ぎ・言葉探しは不確定であることから想定される「これから確定するのではないか」という期待をもとにした類推的な解釈でしかないのである。

なお、平本（2011）では、ターン獲得の機能を持つ「なんか」に「話者性の弱さ」があると指摘する。会話の間や重複を最小限にするための方略が優先されており、ターン獲得を積極的には行っていないため、「発話権の仮取得」と呼べる状態であるという。これは裏を返せば、ターン獲得の積極的理由がない＝談話構築が不十分、ということであり、そこに不確定性を見出すことができる。

次節以降では、「なんか」の全体像、特に不確定性という本質が残存していることを検証するために、二つの現象に注目して考察していく。一つ目は「なんか」と他の談話標識との出現順序について、二つ目は「なんか」に終助詞が付く場合である。

4. 「なんか」と他の談話標識との出現順序

「なんか」の特質を見極める上で、他の談話標識との出現順序（共起関係）を確認するのは重要であると思われる。標識の順序と心内処理や対人調整の流れは並行的に対応しているからである。仮に、矛盾した心内処理の順序の場合は、その順序で標識は出現しないはずであり、そこからそれぞれの標識の独自性を導出することが可能となる^{*5}。

「なんか」と他の談話標識との順序や共起関係に注目している論考には、中溝（2000）、三木（2004）、本間（2011）、松隈（2018）がある。これらは出現順序の傾向を調査し、「なんか」の機能記述の補完材料としている点が共通している。ただしいずれも、共起のしやすさという傾向から「なんか」との機能的な類似性を指摘しているのみで、それらの差異にまで踏み込んだものはほとんどない。その意味では検討の余地があろう。

以下では、4.1節で談話標識「で」「でも」、4.2節で非否定用法の「いや」、4.3節で感動詞「ほら」、4.4節で指示詞系フィラーを取り上げて、「なんか」との出現順序について分析する。

4.1. 「なんか」と「で」「でも」との順序

談話標識「で」や「でも」と「なんか」との出現順序をコーパス^{*6}で確認すると、大多数が「で／でも→なんか」の順序となっている。

- (7) JM006 : で、なんか、朗らかなムードで。
(『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』(以下、『BTSJ』) 003、表記一部修正)
- (8) JF003 : でー、なんか、すっっっごいね、私の隣に座んの。
(『BTSJ』012、表記一部修正)
- (9) JF018 : でも、なんか、変な伝統があるっぽい。
(『BTSJ』019、表記一部修正)
- (10) JM015 : でもなんか、どこもそうなんだろうね、やっぱ。
(『BTSJ』008、表記一部修正)

「で」との共起について本間（2011：111）では、「言葉が追いつかず、言葉が出てくるまでの間に「で」や「なんか」などのフィラーを連続させているのではないか」と述べて、いわゆる時間稼ぎの機能を指摘している。しかし、両方とも同じ機能であるとするなら、「で→なんか」の順序に偏ることが説明できない。

(7)(8)の「で」は話し手の発話に続きがあることを示しており、ターン保

持の機能を持つことが明確である。それと比べると「なんか」は心内処理の不確定性（この場合は不確定性から生じる見切り発車的な展開の表示）が優先的に強調されていると捉えられる。

「で」によってターン保持が示されたのであれば、さらにターン保持を明示する必要性は低い。となると、「なんか」はターン保持以外の機能があることになる。つまり、「なんか」は時間を稼ぐのではなく、不確定な処理結果が出ていることを表示して談話を見切り発車させる機能を持つ、となる。その“発車”の側面がターン保持や時間稼ぎと解釈されてしまうのである。

「なんか」の主たる機能がターン保持でないことは、この出現順序の偏りから明らかとなる。わざわざ「なんか」を選び、かつそれを「で」の後ろに置く理由は、その位置でしか行われたい処理が背後にあるからである。

張（2022：67）では「「なんか」が接続詞に前置されるのは、（中略）対事的な意味はほとんど残らず、ワンクッションを置くという「言葉探し」を表す機能が強く、発話権の獲得という談話構成機能や、相手の興味を引くなどの対人的機能が前景化されているため」と述べているが、そもそも「なんか」が前置される例が圧倒的に少ないことは、「前景化」されるための条件が非常に厳しいからと考えることができる。逆に言えば、不確定性は簡単に消失するものではないということになる。

（9）（10）の「でも」についても同様の説明が可能である。「でも」はいわゆる逆接であり、当然ながら話題が展開することが示される。コーパスにおいて「なんか」は「でも」より前に出現する例がほぼ見られないため、展開を示す以外の機能があることになる。

（9）の「なんか」は（「ばい」との呼応から）副詞と捉えられる。展開される話題が不確定であることを示すので「でも」の後ろに現れる。（10）は副詞とも談話標識とも捉えられうるが、いずれにしても展開を示すというターン保持ではない解釈ができる。

「で」および「でも」との出現順序から、「なんか」はどんな場合においても不確定性が残ったままの形式であることが分かる。図で示したとおり、ターン獲得や話の切り出しといった対人的な調整の機能は、談話構築上の不確定性＝見切り発車から語用論的にさらに派生した機能であることになる。

4.2. 「なんか」と「いや」との順序

ここでは非否定用法の「いや」と「なんか」との出現順序について検討する。前節での「で」「でも」と同様に、「いや」との出現順序についても、「いや→なんか」の順序となる傾向に偏る。

- (11) JF003 : いや、なんか、なまじっかどういいう経歴の人かもわからないから
さー、なんかー、やりにくいよね。 (『BTSJ』012、表記一部修正)
- (12) JF031 : いやーなんか、ほんとに困ってるというか、あれが一番恐ろ
しくて。 (『BTSJ』026、表記一部修正)

富樫(2006)では非否定用法の「いや」について、「心理的距離の開きを回避する」目的で用いられるとしている。つまり、このような「いや」も対人的機能が前景化していると見なすことができる。

「いや」と「なんか」が同じ対人的機能を有するのであれば、出現順序に偏りは見られないはずであるが、実際には大きく偏る。ということは、後ろに現れやすい「なんか」のほうに、対人的ではない側面を認めることができよう。この場合も出力結果の不確定性を表示していると考えられる。

(11)では「やりにくさ」の詳細、(12)では「困っていること」の詳細が心内処理の結果、明確になっていない(あるいは言語化できていない)ことを表示しつつ、見切り発車で談話を進めていることを示している*7。

次の作例でも確認してみる。

- (13) いやー、なんか、すみません。
- (14)?? なんか、いやー、すみません。

松隈(2018:52)では謝罪で現れる「なんか」について、「謝罪という状況の緊張を緩和していると考えられる」と述べているが、はたしてそうだろうか。(13)は「何について謝罪するのかははっきりしていない」という態度が強く読み取れるのではないか。謝罪表現より前に現れる「いや」は典型的な非否定用法であるが、「いや」は対人的側面が強く表出するのに対して、「なんか」は謝罪内容という談話構築的側面に指向していると考えられる。

それは、順序を入れ替えた(14)がかなり不自然となることが証左となる。「いや」で対人調整を施した後に、謝罪という出力情報に対する処理結果が「なんか」によって表示されていると捉えることができる。

したがって、「なんか」は対人調整には特化されておらず、不確定性という本質が残存している標識であることが分かるのである。

4.3. 「なんか」と「ほら」との順序

「ほら」は「話し手にとってはすでに登録済みの情報を聞き手に気付かせたり思い出させたりする」(田窪・金水(1997:269))感動詞である。何らかの認識

を相手に促す働きを持つため、対人的側面を強く持つといえるだろう。

では「なんか」との出現順序はどうだろうか。コーパスを見る限り、「なんか→ほら」の順序に圧倒的に偏っている。

(15) JF052: なんか、ほら、精神的にけっこう不安定だからー、ちょっと心配で。
(『BTSJ』036、表記一部修正)

(16) JFB029: なんかさ、ほら、携帯の番号にしたってメアドにしても聞かれなきゃいけないじゃん。
(『BTSJ』227、表記一部修正)

(15) (16) とも話し手の持つ情報を相手へ認識させるために「ほら」が用いられている。「なんか」が示すのは「今から認識を促す情報は何らかの不確定性を含んでいる（そしてそのまま談話を見切り発車する）」ことであると考えられる。情報そのものの存在とその認識を促すことは当然ながら、この順でなければ成立しない。そのため「なんか→ほら」の順序となっているのである。

さらには、「ほら」単独では促しの直接性や強制力が強まるため、それを前もって軽減するための効果も期待できる。それが、和らげといった解釈となるのであろう。これは、強制力が比較的強い命令・依頼表現は不確定性の概念とは相容れにくく、その場合「ほら」と「なんか」は共起しにくいことから明らかとなる。

(17)?? なんか、ほら見て。

(18)?? ほら、なんか、見て。

「なんか」にターン獲得といった機能が本質的に備わっているのならば、(17)のような命令表現における「なんか→ほら」の順序も可能となるはずである。しかし実際には違和感が生じる。

また、(18)の場合は、認識を促そうとしたが内容の出力に失敗してしまったという解釈が出てくる。見る対象が確定している前提であるはずの命令表現との間に矛盾が生じるため、表現全体に違和感が出るのである。

これらもまた、不確定性が「なんか」に残存していることの傍証といえるだろう。

4.4. 「なんか」と指示詞系フィラーとの順序

次に指示詞系フィラーと呼ばれる形式との順序について見ていこう。実例として目立つのは「なんか→こう」の組み合わせである。

- (19) JM011: や、その辺がさ、なんかこう、ねー、閉鎖的だなーってこう、
言われるんじゃないかなーって思うけど。 (『BTSJ』006)
- (20) JF096: 何かあって何か言っても、しょっちゅう顔あわせてるからその
うちなんかこう、なごやかに許せる雰囲気。 (『BTSJ』209)

中溝 (2000)、本間 (2011) は「なんか」と共起しやすい指示詞系フィラーとして「こう」を挙げている。たしかに、コーパスにおいても「なんか→こう」の連鎖は比較的多く観察できる。ただ、二つの論考とも共起のしやすさという特徴から、指示詞系フィラーと同等の機能が「なんか」にも認められると分析しており、その点は疑問が残る。

これまで行ってきた、「共起しやすいからといって必ずしも同じ機能とはならない」という論点に従うと、三木 (2004) の説明が当を得ていると思われる。

- (21) 「「こ系」が直前に出現しにくいのは、「こ系」直後に「なんか」がくると、「なんか」直前の「こ系」で表現したい内容の表現形式の方向性が決定しており、直後に「なんか」が出現することで再び表現形式の方向性が不明になるためである」 (三木 (2004: 78-79))

前節での「なんか→ほら」と同様に、心内処理的な順序が固定されているといえるだろう。出現順序の偏りを踏まえると、似ているから共起しやすいのではなく、それぞれが別の処理と対応して、順序を決定しているのである。

「なんか→こう」のように、指示詞系フィラーが後ろに来る場合、「なんか」の機能は見切り発車と捉えるのが自然である。「なんか」で不確定なままの談話開始を表示したものの、適切な内容や表現の検索処理が必要となり、「こう」によってその処理行為を表示するという順序になっているとすると説明ができる。落合 (2018) が言うように「こう」が「確定的な言語算出」に関する処理と対応しているのであれば、不確定から確定への処理の流れが想定しやすい。

しかし、「指示詞系フィラー→なんか」の順序も可能である。その場合は語用論的効果が出せず、心内処理の本質のみと対応した形で、検索処理とその後の不確定な出力結果の表示となっていると説明できる。「あの一」を例に見てみよう。

- (22) JF094: なんか、あの一、ファントムみたいな。
(『BTSJ』208、表記一部修正)
- (23) JF017: 中学校までの書道ってさー、あの一、なんか、秋だか春だか？

1 回ぐらいさ、しー、こうみんなで書道書いてー、で、金賞、銀賞、銅賞とかったの選ぶじゃん。（『BTSJ』019、表記一部修正）

「なんか→あの一」の順序である（22）では、見切り発車で談話開始した後に、適切な表現を検索するという処理の展開と解釈することができる。「不確定なまま始めてしまったけれども、やはりちゃんと検索する」という流れである。

一方、（23）「あの一→なんか」では、「あの一」の段階で検索処理したものの、出力結果が不確定であったことを「なんか」で表示するものとなる。「秋だか春だか？」という曖昧な表現となっていることから分かる。

指示詞系フィラーと「なんか」はたしかに共起しやすい傾向にあるが、出現順序の違いによって機能に差異が見られる。しかし、結局のところ、いずれの順序においても「なんか」には不確実性が残存していると説明できるのである*8。

5. 「なんか」に終助詞が付加する場合

飯尾（2006）の言う「強形「なんか」」には、終助詞「さ」が付加された「なんかさあ」という形が含まれている。発話頭に用いられる強形「なんか」は（24）のようにターン獲得の機能を持ち、話題を開始する合図であると指摘している。

- （24） なんかさあ、インザプールっていうオダギリジョーが出てるの、本郷で撮ったって言ってたよ。（飯尾（2006）、表記一部修正）

コーパスでも「なんかさ」の形は（25）（26）のように発話頭に偏っているため、飯尾（2006）の指摘は正しいようにも思われるが、検討の余地があるといえる。

- （25） JM012：なんかさー、『三国志』とかさー、あるでしょ？ シミュレーションゲームの。（『BTSJ』006、表記一部修正）

- （26） JF071：なんかさ、なぜか、最近さ、予定がたくさん入るようなとか。（『BTSJ』115、表記一部修正）

まず「さ」の意味からアプローチしてみよう。富樫（2011）では「計算終了」、蓮沼（2015）では「妥当な結論」、中崎（2019）では「これ以上に推論を展開する必要のない発話」と記述しており、いずれも何らかの処理の区切りを示す

ものであるという点が共通している。

「なんか」の本質が不確定な結果の出力で、「さ」が処理の区切りということは、「結果が出たので処理を区切る」という処理のつながりで二つの形式を結びつけることができる。「なんか」に「さ」が付加しやすいのは、それぞれに心内処理の終了という共通点があるためなのである。これは他の形式（例えば「えー（と）」「あのー」）への「さ」の付加しにくさが傍証となる。

(27) *えーさ / ?? えーとさ / # あのさ / なんかさ

「えー（と）」や「あのー」の本質は情報の検索であり、それは処理継続の表示でもある。継続と区切りは相反する概念である。そのため「さ」が付きにくいのである^{*9}。

もちろん処理の区切りをターン境界と重ねれば、ターン獲得の機能と「なんか」を結びつけることもできるが、それは解釈に過ぎない。少ないながらも発話途中で出現する（ターン獲得でない）「なんかさ」もあることが根拠となる（(28)）。

(28) JM007: プール行ったほうが、なんかさー、こう、うはうはじゃん。

（『BTSJ』004、表記一部修正）

また、見切り発車という効果と絡めて、ターンの区切りを強調していると説明することもできるだろう。が、それもそう解釈されやすいだけであって、「なんかさ」そのものがターン獲得の機能のみを担っていることの説明にはならないといえる。

(29) (30) のように、「なんかさ」が他の談話標識に後続しやすいことも、ターン獲得ではないことを示す一つの手がかりになると思われる。

(29) JM014: そいでなんかさー、あの、よくあのー、なんかメッセージがある方はどこまでみたいなさ、そのアドレスがむっちゃくちゃ長くて。

（『BTSJ』007、表記一部修正）

(30) JM018: でなんかさー、そのじ、時代、始めた時代が結構早い時代だったからさーあ、まだ孫策がさー、あのー放浪軍みたいになっててさー。

（『BTSJ』009、表記一部修正）

さらに、「なんか」に終助詞「ね」が付加した形も見ておきたい。

- (31) JM001: なんかね、1 回殴りあいの、けんかっていうか、言い争いがあつたらしくて。 (『BTSJ』001、表記一部修正)
- (32) JF094: なんかねー、あたし…調べるって言ったじゃん。 (『BTSJ』208)

「なんかね」もまた、発話頭に現れやすいものの、ターン獲得に特化しているとは言い切れない。(31)では「ていうか」、(32)では「じゃん」の部分が不確定さを有する要素である。ここにも談話構築の不確定性を見て取ることができるのではないだろうか。

この「ね」はいわゆる自己確認的な意味を持つと考えられるが、何を確認するのかを考えれば、不確定な出力結果であり、ターン獲得を確認していることにはならないはずなのである。

6. おわりに

本稿では、「なんか」の全体像の構築を試み、不確定性という心内処理の概念がどのような用法においても残存していることを示した。先行研究で指摘された種々の機能は、不確定性そのものの、あるいはそこからの語用論的效果である「見切り発車」から派生するものとして捉えられ、本質が消失・漂白された形にはなっていないことを明らかとした。

今後の課題としては、コーパスのより綿密な調査、「なんか」の音調の記述、性差・世代差との関係などが挙げられる。

注

- *1 渡邊 (1997)、楊 (2019) などに派生の過程が詳述されている。
- *2 なお、鈴木 (2000)、内田 (2002)、本間 (2011) などでは副助詞の「なんか」も含めた形で機能変化の道筋を説明している。しかし、語源的には同じであっても、文法的振る舞いが異なる (副助詞は「なに (か)」との置き換えが不可能である) 以上、無理な結びつけという懸念がある。よって本稿では副助詞「なんか」の扱いは態度を留保しておくこととする。
- *3 処理過程が厳密でない以上、「なんか」が感動詞やフィラーとは言い切れないとする大工原 (2010) の指摘を踏まえて、本稿では語用論的效果を有する「なんか」を仮に談話標識と呼んでおく。
- *4 本稿で言う処理対象の変化を「統語上の時間的距離」と絡めて説明を試みたのが林 (2006) である。ただし、林 (2006) では不定表現の「なんか」が分析対象から外されており、厳密には説明の範囲が異なっている。
- *5 さまざまな談話標識 (感動詞) の出現順序を検証し、それぞれの特徴を考察している

論考に落合（2018）などがある。

- *6 本稿では『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』を用いて「なんか」の使用例を調査した。ただし、大まかな傾向を掴むための予備的な調査にとどまっており、正確な使用数の把握には至っていないことを断ておく。
- *7 もちろん、心内処理標識の演技の使用として見れば、実質的な処理が実在しなくてもよいのであるが、その場合でも「見切り発車でもいいから主張したいことがある」という意志表明と解釈することができ、依然として不確実性が残っていることになる。
- *8 なお、中溝（2000）では「なんか」と「あの一」の違いとして、「あの一」が言葉を検索するつなぎ語、「なんか」が暫定的に選んだ表現で発話を継続させる、としている。
- *9 なお、「あの一」は可能な形だが、検索といった心内処理は示さず、もっぱら語用論的效果（「諫め」など）に特化した用法となっている。

参考文献（本文内で言及したもの）

- 飯尾牧子（2006）「短大生の話し言葉にみる談話標識「なんか」の一考察」『東洋女子短期大学紀要』38, pp.67-77, 東洋女子短期大学.
- 内田らら（2002）「会話に見られる「なんか」と文法化：「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか？」『東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編』Vol.24, No. 2, pp.1-9, 東京工芸大学工学部.
- エメット啓子（2001）「「なんか」—会話への積極的参加を促すインターアクションルマーカ—」, 南雅彦・アラム佐々木幸子（編）『言語学と日本語教育Ⅱ』, pp.201-217, くろしお出版.
- 落合哉人（2018）「対人場面の会話におけるフィラーが関わる連続使用」『日中言語研究と日本語教育』11, pp.73-90, 『日中言語研究と日本語教育』編集委員会.
- 葛欣燕（2020）「日本語フィラーと中国語フィラーの機能に関する対照研究」九州大学博士学位論文.
- カノックワン ラオハブラナキット 片桐（2016）「教育現場とのつながりを意識した対照研究の試み —タイ人学習者の「そして」「なんか」の使用問題—」, 庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己（編）『日本語文法研究のフロンティア』, pp.243-267, くろしお出版.
- 小池康（2006）「モダリティ副詞としてのドウモードウヤラ・ナンカ（ナニカ）・ナンダカ・ナントナクとの関連において」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』21, pp.1-18, 筑波大学留学生センター.
- 小出慶一（2009）「現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究 —多機能化、フィラー、フィラー化—」『日本アジア研究』6, pp.1-37, 埼玉大学大学院文化科学研究科.
- SAITO Makiko（1992）A study of the discourse marker *nanka* in Japanese. Thesis (M.A.), Michigan State University.
- 肖潔（2024）「スタンスから見る「なんか」の機能 —『日本語日常会話コーパス』を使用して—」『言語科学研究』1, pp.81-93, 北海道大学大学院言語科学研究室.
- 杉崎美生（2018）「自己開示場面における「なんか」の即興性」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』24, pp.81-92, 日本女子大学.
- 杉崎美生（2019）「自己開示場面における「なんか」の働き —コミュニケーションの観点か

- ら—』『待遇コミュニケーション研究』16, pp.1-17, 待遇コミュニケーション学会.
- 鈴木佳奈 (2000)「会話における「なんか」の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化学』9, pp.63-78, 大阪大学言語文化学会.
- 大工原勇人 (2010)「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究 —フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて—」神戸大学博士学位論文.
- 田窪行則・金水敏 (1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」, 音声文法研究会 (編)『文法と音声』, pp.257-279, くろしお出版.
- 田中リディア (2020)「友人同士の会話におけるディスコース・マーカー —性差の観点から—」, 宇佐美まゆみ (編)『日本語の自然会話分析 BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明』, pp.161-191, くろしお出版.
- 張未末 (2022)「日本語の雑談の物語開始における談話標識の使用傾向 —「あー、そう、でも、なんか」のしくみ—」『日本語の研究』Vol.18, No.2, pp.55-72, 日本語学会.
- 富樫純一 (2006)「否定応答表現「いえ」「いいえ」「いや」」, 矢澤真人・橋本修 (編)『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』, pp.23-46, ひつじ書房.
- 富樫純一 (2011)「終助詞「さ」の本質的意味と用法」『日本文学研究』50, pp.150-138, 大東文化大学日本文学会.
- 中崎崇 (2019)「終助詞「さ」の機能」『就実表現文化』13, pp.47-94, 就実大学表現文化学会.
- 中田智子 (1991)「談話における副詞のはたらき」, 国立国語研究所 (編)『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』, pp.81-107, 国立国語研究所.
- 中溝朋子 (2000)「ナンカの間投詞的用法について」『日本語文法学会第一回大会』発表資料.
- 蓮沼昭子 (2015)「終助詞「さ」の本質的機能 —認識的モダリティとの共起関係に着目して—」『日本語日本文学』25, pp.1-27, 創価大学日本語日本文学会.
- 林千賀 (2006)「ディスコース・マーカー「なんか」の発達 —意味の漂泊化—」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』1, pp. 39-51, 昭和女子大学.
- 平本毅 (2011)「発話ターン開始部に置かれる「なんか」の話者性の「弱さ」について」『社会言語科学』Vol.14, No.1, pp.198-209, 社会言語科学会.
- PHILIPS Mieko K. (1998) Discourse markers in Japanese : Connectives, Fillers and Interactional particles. Ph.D. (Linguistics), Michigan State University.
- 福原裕一 (2009)「会話に見られる「なんか」の機能拡張 —フェイス・ワークの観点から—」『国際文化研究』15, pp.181-195, 東北大学国際文化学会.
- 本間妙 (2011)「実質的意味を持つフィラーの談話的研究 —特定のインタラクションに表出する「ちょっと」「なんか」「やっぱり」—」中部大学博士学位論文.
- 松隈有莉 (2018)「フィラー「なんか」の使用実態とその機能」『筑紫語文』27, pp.31-57, 筑紫女学園大学日本語・日本文学科.
- 三木一美 (2004)「談話における「なんか」について —間投詞的用法を中心に—」『日本語教育論集』13, pp.75-82, 姫路独協大学大学院言語教育研究科日本語教育コース.
- 宮永愛子・大浜るい子 (2010)「会話における「なんか」の働き —大学生による自由会話データを中心に—」『表現研究』91, pp.30-40, 表現学会.

- 森かおる（2012）「日本語会話における「なんか」の役割 —ターン冒頭要素としての働きに注目して—」『英語学英米文学論集』38, pp.25-41, 奈良女子大学英語英米文学会.
- 山下耕二・水上悦雄（2007）「図形説明課題対話におけるフィラーの分析 —心的マーカによる内的処理プロセスの理解へ向けて—」『自然言語処理』Vol.14, No. 3, 39-60, 言語処理学会.
- 山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.
- YAMAMOTO Yoshiko (1998) Japanese fillers and psychological distance. Thesis (M.A.) , Michigan State University.
- 楊雯淇（2019）「手続き的意味による談話標識「なんか」と「怎么说」の分析」北海道大学博士学位論文.
- ルカムト ユリアナ ルジュキ（2012）「談話標識「なんか」について —日本語教育における観点から—」『日本語・日本文化研究』22, pp.95-108, 大阪大学大学院言語文化研究科 日本語・日本文化専攻.
- 若松史恵（2019）「「なんか」による話題開始についての一考察」『社会言語科学会第43回大会発表論文集』, pp.138-141, 社会言語科学会.
- 渡邊久美（1997）「「なんか」の意味と用法」『広島大学留学生センター紀要』7, pp.49-63, 広島大学留学生センター.

用例出典

- 宇佐美まゆみ監修（2023）『BTSJ 1000人日本語自然会話コーパス』, 科研基盤研究（A）「語用論的分析のための日本語1000人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」（研究代表者：宇佐美まゆみ）及び、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」（2016～2021）